

モア・ディヴェロップメント : 認知の彼方へ

著者名(日)	河本 英夫
雑誌名	「エコ・フィロソフィ」研究
号	6
ページ	109-124
発行年	2012-03
URL	http://doi.org/10.34428/00003441



モア・ディヴェロップメント——認知の彼方へ

文学部 河本英夫

[音イレ] 寺井尚子 シャコンヌ

周期性のあるもののすべて

周期しながら、そのつど変化していくもの、差異と反復を行うもの

ラセン階段各種を基調にする、階段やラセン階段を多く集める(各所で使う)

花時計、日時計も活用する

満開の桜と散り行く桜、満天の星と運行、月に引っ張られてもがく地球、満天の銀河、太陽系(2億年の周期で銀河の末端を周回している)

距離と距離の変動の周期

回遊する魚、渡り鳥、遊牧民

ステンドグラス各種、教会のステンドグラス(ガラスは600年に一度の周期で動いている)

機械、水車各種、時計、砂時計、日時計(フラワー時計)、振り子時計、ビッグベン、身体という時計(腹時計)、細胞分裂、細胞の増殖、植物の鶴巻、天まで届く植物、サバンナを移動する動物、川をわたりきれずそのつど死んでいくムーの群れ、発達障害児、中枢性障害、

デュシャンのレディメイド

現実には出来(しゅたい)する。

出来る現実には、いっさいの理由が欠けている。

何故という問いには答えようがない。

どの原因も際限なく遡ることができる。

だからすべての事象には特定の原因はない。

因果とは、事実の裂けるような苦渋のフィクションである。

だがきっかけはあり、おのずと進行してしまうプロセスはある。

そのためすべてのシステムには履歴があり、記憶がある。

システムがそうなることの理由も原因もない。

だがこうなってしまったことの
確かな事実と現実はある。
そこにシステムの否応のなさがある。

私にはいっさいの選択が欠けている。
私がこのようであるのは、
私が選んだことではない。
だが間違いなくこのようになっている。
誰もこのようである自己以外の自己には成りようがない。
またそれ以外の自己を生きることができない。
すべての発達は選択されたものではありえない。
健常者にとっても、障害児にとってもこの事態は同じである。
中枢性疾患が治癒しても、気が付いたらそうなってくれただけである。
それは私が選択したことではない。
形成プロセスは、認知的選択とは異なる回路である。
私がかうなったのは、私の努力とは直接関係がない。
だが私が努力したから、私はこうなったと思ひこむ。
それが「意識の錯誤」である。
意識は、物事をみずからの直接性に歪曲する。

モア・ディヴェロプメント

——認知の彼方へ

[音イレ]貴婦人のタンゴ
クレーの幼児画、キリコの境界のクッキリしたもの
重度障害児(静止画像複数)

私には、発達はない。
それはすべての健常者と同じである。

私は何かになろうとしてもおらず、
身に付けなければならぬものは何もない。
だが観察者は、私を障害児と呼ぶ。
法外な名称に、私は戸惑うこともできない。
私には欠けているものは何一つない。
だが観察者は、何もかも欠けていると言う。
私の世界は、静寂に満ちている。
静寂とは過剰感覚である。
だが観察者は、それを欠落だと言う。
いったい私に何を求めようとしているのか。

別様である自己は、意識によって知ることはできる。
だがそれはただ知っているだけである。
知っているのは実は観察者である。
だがみずからそう成ることはできない。
そうなる自己をイメージで思い描いてみることはできる。
だが思い描いたから、そうなるのではない。
ここに認知の限界と無力がある。
そして認知を超えた行為の力が必要となる。
成ることは、自分自身にとっても隠された密かな行為であり、一つの奇跡である。
奇跡に立ち会うことのできるセラピストは、幸運の使徒である。

いっさいの選択を欠いて、なお可能性に賭けることはできる。
魂のうちに目覚める未知なるものに賭けるように
おそらく私は進んでいく。
この目覚める未知なるものの量を計量するのが、熟練したセラピストである。
そこにシステムのかけがえのなさ、セラピストの戦いがある。

[音イレ] サマー・ロマンス

発達障害治療例(人見さん、できれば動画)

映像がしばらく進んだところで、以下の文章。朗読は、ドイツ語で。

生あるものは、外的な影響のきわめて多種多様な条件に順応しながら、しかもある種の既得の断固たる独立性を放棄しない。こうした性質をうまれながらにあたえられている。

あらゆる生物がいかに興奮しやすいかを思いみるがよい。条件がほんの少し変わっただけで、ほんのわずかなそよ風が起こっただけで、たちまち個体内に極性が存在することが明らかとなる。それは元来、あらゆる生物の体内にまどろんでいるのである。

緊張とは、生気に満ちたある生物が、自己を表明し、個別化し、対極化しようと万全の準備を整えながら、一見無頓着に見える状態である。

(ゲーテ『箴言と省察』)

[音イレ] 月の光

ダヴィンチの輪郭線各種とボッティチェリ、ラファエロを対比的に

デュシャンの階段を下りる裸婦

渦巻き、入道雲、雨だれ、川の分岐、氷河、流氷、名残雪、

分岐するもの

木本さんカオス図形（静止画、動画、最新画、最新作）

三角錐、四角錐等の逆転像

運動するものは、そのつど輪郭を刻む。

樋を伝わる雨も、同じ量だけ落ちていくのではない。

一時に大量に落ちることもあれば、ちょろちょろとわずかずつ

落ちることもある。

非周期的で非規則的な運動を繰り返している。

運動は輪郭を刻む。

そのことをテクニカルに示しているのが、

カオス理論である。

この輪郭線が、新たな変数を獲得する場合には、新たな運動が生まれる。

それがエマージェンス(創発)である。

北京の蝶の羽ばたきが、フロリダでハリケーンになることもある。

輪郭は、つねに新たな運動への予感に満ちている。

ダヴィンチのまなざしがそこに働いている。

すべての周期的な運動は、そのつど変動しながら

ときとして中心点を変える。

一点で立つ三角錐のように、

まさに運動することによって、かろうじて立つことができる。

生命は、輪郭線を境界に変えていく。

みずからを閉じることで、新たな現実が出現する。

閉じることで、みずからを世界内の一個の特異点とする。

それがすべての生命の特質であり、

システムの否応のなさの由来である。

みずからを閉じることは、生きていることの本性であり、

個体化の別名である。

それは自分の境界を知り、境界を操作することではない。

知るとは異なるかたちで成立する現実がある。

そのことは生きていることにともなう大半の現実である。

システムの本性は、世界へ開けていくことではなく、

どのように開こうともみずからは閉じていることである。

それによって世界に触れることが必要となる。

閉じる回路に接続可能な回路だけが、システムの自己を変える。

(デュシャンの絵、階段を下りる裸婦)

輪郭に代えて、世界に境界が出現する。

ボッティチェリが開始し、ラファエロが継承したこの手法は、みずから自身に回付する運動の剰余と抗いがたい謎に満ちている。

閉じてしまうものには、おのずと出現する内発性が生じる。

それが感情である。

感情はおのずと出現する。

運動が思うに任せないとき、それを代償するように感情は出現する。

感情はかたちを変える。愛はときとして憎しみとなる。

だから愛と憎しみは、過度の関心に裏付けられる。

愛の反対は、憎しみではなく、むしろ無関心である。

邪気のなさは、自足する快であり、慈しみは溢れ出る快である。

[音イレ]

この箇所システム基礎論、光の過剰、光の過剰の反復、逆光、後光、みずからを感じ取る世界的女優（ビビアン・リー、エリザベステーラー、マレーネ・ディートリッヒ、ライザ・ミネリ・・・）
発達障害児と交互に
宇宙空間、満天の星、
砂漠、一面の泥、農地、一面の芝生、一面のひまわり

システムが閉じることをつうじておのずと成立したとき、奇妙なことが起きる。

認知は、本来みずからに回付する。

それと同時に、認知は環境と世界へとみずからを開こうとする。

だがこの開き明けは、みずからに回付することをつうじてしか成立しない。

認知は、すでに知ることのできるものだけを、知りうるだけである。

認知しなければ分からない人は、認知しても分からない。
説明しなければ分からない人は、説明しても分からない。
言語で語らなければ分からない人は、言語で語ってもわからない。
そこにタイミングがある。

認知的訓練は、運動訓練以上にタイミングと結び付く。
知るとは、行為の可能性につきしたがうことによるのみ成立する。
ただ知ることによっては、行為の可能性は拡張されはしない。
知るとは、運動を導くことはない。
つねに認知の一步先が必要となる。
しかも認知を括弧に入れることによるのみ到達される前進がある。

閉じる運動に不可分にとまなうのが触覚である。
そのため触覚はおのずと出現する感覚であり、
通常、それじたい潜在化している。
このとき認知はつねにすでに遅すぎる。
いっさいの現実到手遅れになって出現する表象がある。
その表象を現実の代替物として解釈を行うのが、認知である。
認知は、それじたい一つの代償行為である。
そのため意味をあたえることは、世界を過度に安定化させてしまう。
世界に意味をあたえる手前に、世界に触れるという広大な体験の領域がある。
手遅れになることによって獲得されるアドヴァンテージはある。
それが人為的に選択の場所を開くことである。
意識とは、手遅れの別名であり、
意識を直接的に活用することは、
全身を持ち上げるために、自分の靴ひもを引っ張るようなものである。
認知をつうじて接近し、まさに認知を括弧に入れることによって、
確保される体験領域がある。
認知の手前に潜り込むこと、それが現象学の課題である。

(光の点滅、点滅の反復、強度性の経験を導く、反転するもの)

システムは環境とカップリングする。環境は、認知の対象でもなければ、ましてや情報ではありえない。

システムと環境とは、創発の水準を異にする。

このズレに、感覚が成立する。

湿度の過小は、味覚も臭覚も変容させる。

感覚は、環境を感知するのではない。

感覚はみずからを感知する。

(ヨハネス・ミュラーの類種エネルギー説)

環境の変化率は、感覚に変化を強制する。

この変化は、感覚の本性に従ってしか起こらない。

感覚は変化率をきっかけとして新たな動きを獲得することができる。

この変化率こそ、強度である。

[音イレ] アヴェマリア

草原遠景、森林遠景、大河遠景、地球遠景、熱帯植物、一面の裸子植物

シダの群生、マングローブ、ラセン階段

影、人の影、建物の影、影を多く、以下朗読

クリムト

臨床像各種(青木さんの重度片麻痺)

岩崎さん重度片麻痺、できれば左麻痺

間に、稲垣君のかつての岩登りと現在の岩登りの違いがくっきりと出るように

シダの少女は綱の目状にひろがった水路を白い船で進む。樫先が天から降ろされ、水面の風景が放射線状に割れる。わずかに、ちいさい何か壊されていく。

シダの少女は背中に時計の針をくくりつけている。シダの少女はあまり重いふうもなく、時計の針を背負ったまま、時おり空をみあげてはまた、白い船の樫先を水面へと向ける。水分を含んだ風が、シダの少女の首筋を舐める。

水路の両岸にシダ類は増殖していく。シダ類は水の流れとともにみずからの影をひき

ずって、次第に形態を不明確にしていく。

シダ類の増殖は、みずからの残像による増殖ではなく、中心をもった、宇宙拡大の図式のように増え続ける。たくさんの胞子が霧状に散って、風景の中心をシダの少女は進んでいく。

(芦田みゆき『喫状の記号』)

左脳とその言語中枢を失うとともに、瞬間を壊して、連続した短い時間をつないでくれる脳内時計も失いました。・・・

「自分であること」は、変化しました。周囲と自分を隔てる境界をもつ個体のような存在としては、自己を認識できません。ようするに、もっとも基本的なレベルで、自分が流体のように感じるのです。・・・

左脳は自分自身を、他から分離された個体として認知するように訓練されています。今ではそのかた苦しい回路から解放され、私の右脳は永遠の流れへの結びつきを楽しんでいました。もう孤独ではなく、淋しくもない。魂は宇宙と同じように大きく、そして無限の海のなかで歓気に心を躍らせていました。

(ジル・ボルト・テイラー『奇跡の脳』)

[音イレ]映像の音をそのまま使う。あるいは軽く

映像を切り変えながら

大野一雄 歩行 背中、手

土方巽の歩行

天児牛大の歩行

勅使川原の歩行

大越さん映像(歩行)

老人歩行、

幼児歩行

平均的歩行

歩行ロボット

手段歩行

タップダンス(タケシ)

映像を比較的長めに

映像を対比的、対照的に

背景映像に、津波、大震災、地震交互に
二足歩行とは天災のことである。

学ぶことのできないものがある。

学ぶという仕方では習得できないものがある。

追憶のなかでしか確認できない学習はある。

三ヶ月後にはじめて確認できる治療はある。

停滞する時期を潜らなければ、開始できない治癒がある。

確認できる改善は、すべて代償行為にすぎないような治療がある。

ただちに行き止まりになる治療がある。

家庭に帰ると消滅してしまうような治療がある。

何か筋違いで、どこにも接点のない治療がある。

それをあなたのためだからと強制するセラピストがいる。

病態はそれじたい一種の個性である。

患者はこの個性を固有に生きている。

固有に生きていることが何であるかを本人は知りようがない。

知ることとは別の現実がある。

内部観察がもっとも有効に機能するのは、知ること以前の現実感触が届く場合である。

セラピーが一つの組織化を行う営みである限り、「個体」(インディヴィジュアル)の組織化にかかわっている。

個体は、最低限のまとまりをもつ段階から、みずからで自分を統御するような場面まで、多くのレベルとモードがある。

感覚運動性の非随意的動きだけで接続する個体もある。

感覚運動性の随意的動きで接続している個体もある。このとき首が動かさないのであれば、首より上は個体の外にある。

触覚性感覚の接続で成立する個体もある。このとき触覚的に感じ取れない身体部位は、個体の外にある。

視覚性世界を含めた視覚運動接続の個体もある。視野の欠落は、まさにその欠落を作ることによって、個体を維持している。

言及性機能は一般に高次機能であり、それじたいで個体を形成することはない。それらは個体についての二次的な機能である。

ところが言及性機能は、みずから自身に言及することによって、高次の個性性を形成することができる。言語的記述は、言語的記述で一貫してそれじたい個体化する。意識的反省は、自己意識となってそれじたい個体化する。

言語も意識も、それじたいにとってすでに手遅れになった事態を生み出してしまう。

[音イレ]

夕暮れの街、夜の街、砂漠、世界の夜景各種、イタリア、東京、ペキン、神戸、長崎、日が昇る場面、朝焼け、ラセン階段各種

思考は、まるで宿命のように物悲しい。

習慣が、ただそれが習慣だと言う理由だけで反復されるように、思考はみずからを繰り返す。そのためつねに両義性を帯びてしまう。

しかも意識は、あまりにも自明であるために、意識そのものが何か本質的な働きをしていると思う以外にない。それは意識の錯誤であり、しかも意識の全体重を乗せた錯誤である。意識経験はすでに一つの確信に満ちた錯誤である。

人間は、自然のうちで最も弱い一本の葦にすぎない。しかしそれは考える葦である。——宇宙が人間をおしつぶすにしても、そのとき人間は、人間を殺すこのものよりも、崇高であろう。なぜなら人間は、自分の死ぬことを、それから宇宙が自分よりずっと立ちまさっていることを知っているからである。

(パスカル『パンセ』三四七)

人間の尊厳はまったく思考のうちにある。しかし、この思考とは何であろうか。なんとそれは愚かなものであろう。

いったい、思考はその本性からいえば驚嘆すべきものであり、また無比のものである。思考が軽蔑されるのであれば、並はずれた欠陥をもっていたのに違いない。じっさい、思考は、もうこれほど笑うべきものは他にないというほどの欠陥をもっているのである。

(パスカル『パンセ』 三六五)

「意識」—表象された表象、表象された意志、表象された感情は、なんとまったく表面的なものであることか、私たちの内的世界もまた「現象」である。

(ニーチェ『権力への意志』 四七六)

私たちは内的世界についてもその現象性を固執する。すなわち、私たちが意識するすべてのものは、徹頭徹尾、まず調整され、単純化され、図式化され、解釈されている。

(ニーチェ『権力への意志』 四七七)

アナロジーによる伝達を、わたしは有用でもあれば好ましくも思う。アナロジーの場合は、のさばり出ようとはせず、何ものをも証明しようとしなない。それは他の場合と対峙はするが、これと結びつくことはない。アナロジーの場合がいくつかあっても、それらはまとまって隊列を組むことはなく、よい社交の集まりのように、つねに、他に何かをあたえるよりは、むしろ他を活気づけるのである。

アナロジーには、議論を打ち切らず、本来、最後のものを求めないという長所がある。

(ゲーテ「箴言と省察」)

[音イレ]

原語で朗読

生命、氷、地球(ガイア)、宇宙、ラセン階段

人間は分析しようとして対象を扼殺している。

科学も学問ももうたくさんだ。

それらの不毛の書物を閉じるがよい。

そして前に進み出るのが、万象を見、万象に感動する
心を抱いて、前に進み出てくるのだ

生命は、人間の精神と心象を浄める

無限の富を蓄えた宝庫なのだ。

健気な姿をとおして、知恵が迸り出て

邪気のない姿をとおして、真理が迸りでてている。

(ワーズワース「発想の転換を」)

とどまるということは

氷に閉ざされた流れのようなものではないか

愚かなことだ、聖なる生命の霊がいったい

どこかで眠ってとどまっていることがあろうか

遅すぎないうちに自分の力で分かれの時を

選んだものたちだけが、

いつまでも一体になったままでいるのだ。

(ヘルダーリン『エンペドクレスの死』)

暗闇に沐浴して寛ぐことが私にも許されるのだ。まず鍵を二重にかけることにしよう。こんなふうに鍵を回すと、孤独が増し、現に私と外界を分断しているバリケードが堅固になるような気がする。

すべての人間に不満であり、私自身にも不満である。この夜の沈黙と孤独のなかで、私は多少なりともわが身を購い、みずからの誇りを取り戻したいと思う。かつて私が愛した人々の魂よ、私が詠った人々の魂よ、どうか私を強くし、私を支え、世の虚偽と腐敗した瘴気を私から遠ざけてください。

(ボードレール『パリの憂鬱』)

[音イレ] ナナムスクーリ、アルハンブラの思い出、エンディング
映像[葵ちゃん]

どのような治療であれ、個体の出現にかかわることによってはじめて有効となる。個体の出現に関与できなければ、すべての治療は外的強制力か、抵抗すべき刺激にすぎない。世界へと触れることが、同時に個体の形成になるような局面がある。それこそ認知神経リハビリテーションの現場である。世界に触れるようにしてはじめて形成される自己がある。

その近傍に希望がただちに行き止まり、壁に突き当たるような治療がある。成功に見えて、可能性を封じる治療がある。治ったと喜びながら、すべてを封じてしまう代償的治療がある。そのためつねに、エクササイズとともに進行する事態へのまなざしが必要となる。それがリハビリ的病理である。エクササイズは、治癒の開始であるとともに、疾病の新たな開始でもある。そこに必要とされる病理がある。リハビリこそプロセスのさなかでの病理を必要とする。

個体の獲得の手掛かりをえることは、それじたいが一つの希望である。

個体の手掛かりとなる選択がある。

みずからの新たな可能性を引き出すような選択がある。

それは、行為することがみずからの希望であるように

みずからの可能性を開くことでもある。

そのことに立ち合うことのできる治療は、確かに存在する。

そのときセラピストは、紛れもなく、希望の使徒なのである。

出演

人見眞理

稲垣諭

岩崎正子

制作

大崎晴地

畑一成

池田由美

嶺村圭

映像提供

木本圭子

稲垣諭

岩崎正子

人見眞理

大越友宏

青木直子

照明

三田載久

演出

人見眞理

作・プロデュース

河本英夫